

教えてくれた野球 甲子園で雄姿を

亡き父へ感謝の一打

光星 決勝打の澤波選手

12日の第101回全国高校野球選手権2回戦、智弁学園（奈良）との激闘を制した本県代表の八戸学院光星。決勝打を放った背番号18の澤波大和選手（3年）＝奈良出身＝は小学6年生の時、野球を教えた父・俊也さん（享年49歳）を白血病で亡くした。野球が大好きだった天国の父に、甲子園で戦う姿をみせたい。その一心で、度重なるけがや病気を乗り越えてきた澤波選手。チームを勝利に導き、決勝タイムリ―を放ち、亡き父の期待に応えてみせた。（大久保拓地）

【本記1面】

度重なるけが、病気を乗り越え

この日途中出場の澤波選手は、8―8の九回2死満塁で初打席を迎えた。追い込まれた相手投手の心理を読み、初球の内角直球を狙い打ち。打球は一塁手を強襲する会心の一打となった。試合後のお立ち台に立った控え外野手は「まさか自分がヒーローになるなんて」とほかにんた。

澤波選手が本格的に野球を始めたのは小学4年のころ。俊也さんの勧めで地元クラブチームに入り、日夜練習に明け暮れた。日課は俊也さんとのキャッチボール。地元の草野球チームに所属していた俊也さんから、野球のいろはを教え込まれた。

小学5年生になった2012年5月、俊也さんは白血病の診断を受けた。2度の骨髄移植を経ても完治せず再発。澤波選手との日課は、一時的に退院した時だけになったが、「体はかりがりに、球の力強さはちっとも変わらなかった」（澤波選手）。闘病を続けた俊也さんだったが、13年9月2日、帰らぬ人となった。中学でも野球を続けた澤波選手は「野球が大好きだった父のため、甲子園を目指す」と光星に進学。しかし1年の時に左膝、2年時には右膝の半月板を損傷、それぞれ3カ月入院する大けがを負った。今年の夏の大会直前には気管に穴が開く「縦隔気腫」を発症。1週間入院を余儀なくされ、医師からは「夏は間に合わない」と宣告されたほどだった。

「焦りしかなかったが辛抱強く治療を続け、甲子園でのベンチ入りをつかみとった。『野球の基礎はみ

んな父が教えてくれた」と澤波選手。「タイムリ―を打ったあと、心の中で父に『ありがとう』と伝えた。自分の甲子園での活躍をきくと誰よりも喜んでくれてると思う」と晴れやかに笑った。